

トピックス

Skin, Red or Alive

坂井妙子『レディーの赤面——ヴィクトリア朝社会と化粧文化』（勁草書房、2013）

大久保 謙



デビュー作『ウエディングドレスはなぜ白いのか』（1997）以来、『おとぎの国のモード』（2002）、『アリスの服が着たい』（2007）と、斬新な視点でヴィクトリア時代のモード文化史の新領域を開拓してきた坂井妙子の新著が『レディーの赤面』である。「白」から「赤」へ？ という以上に、これまで徹底して「服」に着目してきた著者が、「顔」それも「赤面」という身体そのものに関心を向けたのが興味深い。とはいえ、衣装論と身体論ことに皮膚論が、もとより切り離しえないものだという事は、この分野の日本での先駆け、鷺田清一『モードの迷宮』が明らかにしている。「衣服は身体という実体の外皮でもなければ、皮膜でもない。衣服が身体の第二の皮膚なのではなくて、身体こそが第二の衣服なのである」と鷺田は論じる。（さらには、衣服にあわせて身体を形成する例として、ヴィクトリア時代のコルセットを挙げている。）

鷺田の著書が1989年刊。その後、20世紀末から現在に至るまで、テクノロジーによる身体概念の変容、サイボーグ論、ポストヒューマン論などの関連で、「人間」あるいは「主体」の自明の境界とされてきた皮膚の意味について、さまざまな領域の研究者が再考するようになる。港千尋の『考える皮膚——触覚文化論』が1993年。やはり先駆的な皮膚論の名著『鏡と皮膚』で、谷川渥がマクルーハン（「電気メディアは一挙に皮膚を拡張した」）を参照しながら「皮膚の時代というべきだろうか」と述べたのは今から20年前、1994年のこと。そして1999年には、現時点の皮膚論流行の新たな起爆剤となった、ドイツの俊英クラウディア・ベンティーン の『皮膚——文学史・身体イメージ・境界のディスクール』が登場する。

2002年の英訳に続き、今年（2014年）、田邊玲子による周到な日本語訳が刊行された。ベンティーンは書いている。「皮膚の文化史を考えるさいの中心的なトピクスに共通するのは、皮膚がどんな社会的状況においても、つねに意味づけられ解釈されていること、すなわち皮膚が、深部、すなわち精神的なもの、内的性格の表現だと理解され、あるいは誤解されていることである」。『レディーの赤面』のエピグラフとして、これほどふさわしいフレーズがあるだろうか。

「一九世紀、特にヴィクトリア朝期における、情動表現の規範を赤面から考察する」(p. 2) という『レディーの赤面』は、従って、絶妙のタイミングで書かれた、ヴィクトリア朝文化研究の側からの皮膚論への応答だと言える。序論で19世紀における観相学の大衆化について述べたのち、著者はまずダーウィン『人、および動物の表情について』（1872）における赤面論の新しさと限界を的確に指摘する。続いてディケンズ『バーナビー・ラッジ』（1841）の脇役ドリー・ヴァーデンの「赤面」を解釈し、「顔色」の意味論から化粧の文化史へと説き及ぶ。「赤面」の代用品（つまりマクルーハンのいう身体感覚の拡張！）としての「ブラッシュ・ローズ」を論じた第五章は、思いがけない「モノ」から時代の思潮を読み取る著者の真骨頂で、本書中の白眉だろう。最終章「ヴィクトリアンの自己抑制と赤面」もたいへん興味深い。若い女性にとっては「魅力」ともなり得た赤面が、男性にとっては治癒すべき「病気」と見なされたという。面白いのはそうした医学的な観点からの赤面論が出そろった1890年代が、本書では言及されていないが、世紀末最高の皮膚論小説とも言うべきワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』（1891）を生んだ時代でもあるということだ。青年ドリアンは、第2章で登場するやいなや「顔をさっと赤らめ」、自身を描いた肖像画と対面すると「頬を紅潮させ」るのである。考えてみれば「表しつつ隠す／隠していることを表す」という赤面の性質は、「秘密」そのものの完璧なメタファーであり、『ドリアン・グレイの肖像』というクローゼット小説の解説格子としてこそふさわしい。『レディーの赤面』で、メアリー・ブラッドンやウィルキー・コリンズ（あるいはディケンズも？）など「秘密」をプロットの核に据えたセンセーション・ノベルの作家がしばしば取り上げられるのも、当然と言えるだろう。

最後に、『レディーの赤面』からさらに展開しうるヴィクトリア時代皮膚文化論の可能性を二つ挙げておこう。ひとつは、近年の皮膚論がしばしば問題にする「触覚」の問題である。観相学と化粧論が中心になっている本書は、徹底して「視覚」による皮膚論だからだ。ヴィクトリア朝文化における「触れること」（あるいはその禁止）をめぐる皮膚論は、まだ開拓の余地があるだろう。もうひとつは、「切り裂かれ、剥がれる皮膚」という主題。皮肉なことに、19世紀は解剖学の全盛期であり、『レディーの赤面』によれば「皮膚」を「化粧」によって覆うことの是非が論じられていたという1858年には、皮膚を剥がれた解剖学図譜のロングセラー『グレイの解剖学』が刊行されている。そのあたりの事情はルース・リチャードソン『グレイ解剖学の誕生』（2008、矢野真千子訳、2010）に詳しい。ルドミラ・ジョーダノヴァの今や古典的名著『セクシャル・ヴィジョン』（1989、宇沢美子訳、2001）が明らかにしたような、女性の皮膚を剥ぎ取り、「対象（オブジェ）」として眺める近代医学の眼差しは、『レディーの赤面』で論じられる皮膚のメイク・アップと表裏一体の関係にあるのではないか。「化粧をした娼婦」を標的にした切り裂きジャック事件（1888）が、グロテスクかつ暴力的なかたちで、両者の共犯関係を暴き出している。